生き物調査

生き物にやさしい農業基盤整備のために

～田んぼは生き物の大事なすみか～

「田んぼやその周辺にいる生き物は？」と聞かれたらいくつ思い付くだろうか。カエル・トンボ・ドジョウ・タニシなど、その答えは挙げきれないほど多い。こんなに多くの生き物がいる理由は、田んぼの環境にある。水温が高く、流れも穏やかな田んぼは、魚類や両生類の産卵から成育の場に適しており、餌となるプランクトンが多いことも、産まれたばかりの稚魚や幼生には好条件である。

加えて重要なのが、水路やため池だ。これらは、生息場所だけでなく、生き物が周辺の河川や森林へ移動するための経路としても使われる。生き物にとっての最適な生息場所があること、それらを繋ぐネットワークが形成されていることが豊かな生態系のために必要なのだ。

～田んぼの生き物にせまる絶滅の危機～

しかし、かつては当たり前のようにその姿を目にすることができた、メダカやドジョウなどの田んぼ周辺の生き物も絶滅の危機にある。

田んぼの生き物にとってすみやすい環境は、農村地域の継続的な農業活動により維持されてきた。近年では高齢化などにより農業者が減少し、これまでのように維持管理された田んぼは減少傾向にある。

～生き物にやさしい農業基盤整備～

農村地域の田んぼを守るためには、適切な農業基盤の整備を行い、農業者にとって営農しやすい環境を整えることが重要である。しかし、人間のために行われる整備が、生き物にとっても快適であるとは限らない。それゆえ、工事を実施した後も生き物がすみやすい環境を維持できるように、整備前の環境を知る必要がある。そのための事前調査が「生き物調査」である。生き物調査により周辺の環境を詳細に把握していれば、工事の計画に環境配慮施設を組み込み、生き物がすみやすい環境に近づけることができるのだ。

生き物調査とは

どのような方法で環境に配慮するのかを決めるために行う事前調査が「生き物調査」である。主に市町村や県などの関係機関、地元住民、学識経験者などのメンバーで、農業農村整備の工事を計画している地区の水路等の動物を網で捕獲、または植物を採取し、それらの種類や数、大きさなどを記録する。

確認された希少生物の例

（調査日：令和２年６月・９月　場所：新庄市）

現在も様々な希少生物が生息している！

調査の結果を基に、見つかった生き物に合った環境配慮施設※を造るなど環境に配慮した整備を行う。

※環境配慮施設の工法例

水田や水路、陸上を移動して生活していたカエルやイモリなどの生き物が、３面コンクリート水路になると這いあがることができなくなり、移動できなくなってしまう。

コンクリート水路は流れが速く、植物も少ないため、生き物がすみづらい。ワンドで流速を低下させることで、魚類の休憩場所や両生類のすみかができる。

✕ 流れが単調で流速が早い

○ よどみができ、土砂がたまる

ちなみに…

生き物がどれくらい移動しているかというと…

（例）アカハライモリの一生

アカハライモリを例に挙げると、右の図のように、一生の間に水中と陸上を行き来して生活している。そのため、生息場所だけでなく、移動経路を確保することが重要になる。